

百色のクレヨン



滝沢忠義 著

桐原書店

百色の クレヨン

滝沢忠義 著

偕原書店

百色のクレモン

一九八四年五月一日 第一 刷発行
一九八四年六月五日 第五 刷発行

定価 九八〇円

著者 滝沢忠義／カバー絵 原田泰治

発行者 山崎賢二

発行所 株式会社 桐原書店

東京都杉並区阿佐谷南三ノ四ノ二二(〒一六六)
電話 〇三(三九二)五一二一(代表)
振替 (東京)六一五五二四四

印刷 カシヨ印刷株式会社

装丁 鈴木 堯

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

0077—8711—1381

著者略歴

滝沢忠義

昭和七年千葉県九十九里浜に生まれる。
長野高校を経て早稲田大学を卒業。現在、信越放送ディレクター。早大在学中、フランス文学を専攻。著書に『ロオトレアモン覚書』（電算出版刊）『日本百名峠（共著）』（桐原書店刊）がある。

百色の クレヨン

滝沢忠義 著

四原書店



久樹が失明する直前に描いた絵

百色のクレヨン——目次

遙かな歲月……………11

小さな生命の誕生……………15

六カ月の早産児……………17

ガラスの保育器……………22

十銭の白銅貨……………26

玄米がゆ……………33

暗闇の世界……………41

ダイヤむしかまど……………43

白濁した眼……………49

アカイ、アカイ、アサヒ……………55

チアンの描いた絵……………61

失われた視力……………67

闇によみがえる記憶 69

生あるものの記録 75

お山の杉の子 77

折り紙の楽譜 82

児童憲章 91

「愛の悲しみ」 101

家族 107

水の音の聞こえる家 109

ボク、テンカンオコサナイヨ 117

指に伝わる言葉 130

虫の知らせ 140

夜の泣き声 149

百色のクレヨン……………161

緑色の空気……………163

唇に歌を……………170

最後のチャンス……………178

濁った水晶体を摘出……………184

よみがえった光……………192

臉に残る色彩……………201

両眼が開いた！……………209

メガイタイヨ……………215

再び生きる……………225

自立の芽……………227

リハビリセンター……………234

車椅子のドライバー……………243

母と子の旅立ち 252

あとがき 258

遙かな歲月

迎え盆の八月十三日——。小松邦子は、車椅子のまま乗れる福祉タクシーを頼んで、わが子を家に連れて帰ることにした。

久樹が車椅子に乗ったまま、タクシーで家に帰るのは、生まれて初めてのことだった。

彼は四十年間、すわることもできずに寝たきりで過ごしてきた。だから、すわったままタクシーに乗り、車外の風景を見るのは、初めての経験であった。

長野県リハビリテーションセンターから久樹の家までは、走っても十分はかからないわずかな距離だった。タクシーに乗ると、まわりの山や川や田んぼが、風のような速さで駆けぬけていった。そんな珍しい動く風景を、久樹はサイダー瓶の底を思わせるようなぶ厚い眼鏡越しに眼にして、頭をゆらゆらさせながら、心もとない声で隣にいる母親に話しかけていた。

「アタマガコロガッチャウヨ。アタマガオチルヨ」

事実、車のなかで久樹の頭は、右に左に頼りなく揺れ動いていた。無理もなかった。四十年間寝たきりで過ごしてきた久樹は、発育不全の骨萎縮症だった。骨は輪郭さえはっきりしない

状態で、もろくなっていた。軟骨も内部が硬くなっていて、ひじをまげることもままならなかった。そして手を上げるだけの筋力さえなかった。

その久樹がすわったかっこうで、特別仕立ての車椅子に乗り、福祉タクシーに揺られている。

幼児語のようなたどたどしいわが子の言葉を聞いて、母親は思わずほえんだ。

「まだ、首はつながっているからだいじょうぶ。落っこちたらお母さんが拾ってあげるよ」

おどけた表情で答える邦子の胸には、車椅子に乗れるようになった息子を祝福する気持ちがみなぎっていた。明るい車内であった。

わが子が車椅子にすわっているのが信じられない夢の世界のことにように思われた。

二人を乗せた福祉タクシーは、浅川の土堤を走り、団地の細い道を通って、あつという間にわが家に到着していた。

久樹にとって、久しぶりのわが家であった。

玄関には、「小松久樹」と記した表札がどっかとかかっている。

たとえ障害者であっても、立派な一家の主人だ。母親の邦子は、なぜか自分がかかげたその表札を見ると安堵を覚えていた。

「たとえば、療護施設の設備や環境が良いといっても、この子を家から手離すことはやめよう。

自分の生命が続くかぎり、一緒に暮らすのがいちばんいい」

邦子は、四十歳にして、ようやく幼児同然の息子の動きを見守りながら、

「それにしても、ここまでの道のりは、なんと長かったことだろう」

と、遙かな歳月を振り返っていた。

